

# 事業報告書

自 平成 27 年 4 月 1 日  
至 平成 28 年 3 月 31 日

## I 事業活動に関する事項

### [主催事業]

#### 1. KAWASAKI しんゆり映画祭

##### ■第 16 回ジュニア映画制作ワークショップ 協賛：小田急電鉄株式会社

期間：2015 年 6 月 14 日（日）～11 月 3 日（火・祝）/作品上映 11 月 3 日（火・祝）  
場所：日本映画大学、岡本太郎美術館、川崎市アートセンター、市民ミュージアム  
参加者数：17 名（チーム：電池切れ）

川崎市とその周辺に在住・在学している中学生を対象とした映画制作ワークショップを開催。

総合指導に日本映画学校出身で長年ワークショップに技術サポートとして関わって頂いている川久保直貴氏、技術指導に植松亮氏（撮影）を迎え、技術サポートとして日本映画学校卒業生 2 名が参加して指導が行われた。

5 月末より川崎市教育委員会の協力により、市内公立中学校生徒に参加説明会チラシを配布。アートセンターの他、川崎市中部の説明会として高津市民館でも実施した。

6 月 14 日（日）に参加児童 17 名と市民ボランティアスタッフの顔合わせとオリエンテーションを行った。同日、川久保講師による脚本指導が始まり、参加生徒同士話し合いながら、作成が進められた。今年の脚本制作は場所を岡本太郎美術館、市民ミュージアムの施設を借りて行われた。

7 月 12 日（日）には映画技術講座を実施。技術指導の植松亮氏より、日本映

画大学にお借りした実際撮影に使用するカメラ等機材の使用方法や映画撮影の方法の講義を受ける。

その後、ロケハンや小道具作成などの撮影準備を経て、7月25日より撮影開始。撮影場所は新百合ヶ丘近隣を使用し、撮影は7月25日～8月5日の期間に行った。

8月6日より編集作業に入り、参加者全員が編集作業を体験。その後、日本映画大学のスタジオを利用してアフレコ・MA作業を行い、『ムッツマン』(25分)を完成させ8月18日に披露試写を行った。

作品完成後は川崎市アートセンターのスタッフの指導・アドバイスにより、11月の作品発表会へ向けて広報物作成(チラシデザイン作業等)を実施。今年度は作品内容がヒーロー物ということで、発表会内での寸劇(ヒーローショー)の準備や、来場者へのプレゼント用のシール作成にまで及んだ。

11月3日(火・祝)にKAWASAKIしんゆり映画祭(会場:川崎市アートセンター・アルテリオ小劇場 195席)にて一般市民対象に完成作品を上映し、参加生徒による舞台挨拶や寸劇が行われた。



■脚本作成



■講師指導風景



■ロケーション撮影風景

#### ■第16回 なつやすみ野外上映会 共同主催:麻生区

期日:2015年8月22日(土)

場所:川崎市立麻生小学校 校庭

参加者数:1011名(延べ入場者数)

16回目を迎えた恒例の「なつやすみ野外上映会」を川崎市立麻生小学校の協力のもと、開催した。今年は『バック・トゥ・ザ・フューチャーPART2』(108分/1989年)を日本語吹き替え版にて上映した。

1989年の公開当時に描き出された未来2015年と実際の2015年を比べて親子で楽しんでもらいたいという意図により作品は選定された。

広報活動は、川崎市や麻生区の広報誌への掲載の他、タウン誌や雑誌への掲載、近隣小学校へのチラシ配布等を7月より展開。

当日は夕方より、恒例の屋台コーナーを小学校校庭に開設。飲食の屋台の他、ゲームコーナーなどを設置し、多くの親子が訪れ盛況となった。

昭和音楽大学生有志によるサクソ四重奏や、新百合ヶ丘をホームグラウンドに活動する演劇集団「company ma」（同年9月にKAWASAKI アーツ主催 旗揚げ公演実施）のメンバーによる上映前の寸劇（『バック・トゥ・ザ・フューチャーPART 1』のダイジェスト）の上演は、作品上映に向けて観客と一体感をもたらす内容となり、会場のこどもたちにも好評だった。

昨年好評だった地元団体「AirGreen」協力によるスウェーデンの棒倒しゲーム「クップ」も上映前の時間に開催し、地域の他団体との協力も継続して行われた。

今年度も日本赤十字社へ看護師の派遣を要請したが、観客で体調を崩された方はいなかった。



■テント設営風景



■スクリーン設置（北島工務店）



■ゲームコーナー



■屋台の様子



■company ma による上演



■作品上映中の様子

## ■第 21 回 KAWASAKI しんゆり映画祭 2015

### □ 本祭実施概要

- 主 催 NPO 法人 KAWASAKI アーツ
- 企画・運営 NPO 法人 KAWASAKI アーツ・映画祭事務局
- 映画祭代表 千葉茂樹
- 共 催 川崎市、川崎市アートセンター、川崎市教育委員会、日本映画大学、  
(一財)川崎新都心街づくり財団、昭和音楽大学
  - 後 援 「映像のまち・かわさき」推進フォーラム、麻生区文化協会、  
(公財)川崎市生涯学習財団、NPO 法人しんゆり・芸術のまちづくり
  - 協力・協賛 イオンエンターテイメント株式会社、小田急電鉄株式会社、イオン新百合ヶ丘ショッピングセンター、小田急新百合ヶ丘エルミロード、ホテルモリノ新百合ヶ丘、川崎信用金庫、新百合農住都市開発(株)、(株)エーイーティー、(株)北島工務店、香港飲茶シノワーズ、(有)カンガルー、寡黙堂、マプレ専門店街、川崎商工会議所、(一財)川崎市観光協会、毎日新聞、東京フィルメックス、合同会社東風、麻生.tv、J:COM せたまち、稲田ニュース社、NPO 法人 k-press、(株)タウンニュース社、マイタウン21、ミスモ編集部
- 期 間 11月3日(火・祝)～11月8日(日)
- 会 場 川崎市アートセンター・映像館(113席)、小劇場(195席)
- 上映作品数 22作品
- ゲスト 30名
- 総入場者数 2445人(1日あたり平均408人)
- ボランティア 60名(延べ人数)

2015年度のKAWASAKIしんゆり映画祭は開催場所を川崎市アートセンター・アルテリオ映像館、アルテリオ小劇場の2会場に変更し、期間6日間での開催となった。昨年は平日に使用していなかったアルテリオ小劇場を稼働させることで上映枠の確保が行なわれた。バリアフリー上映や活弁付での名画上映など今までの実績を継承しつつ、「かわさきシネマアワード」との連動、他団体「キノログ」と提携した映画鑑賞とワークショップをセットにしたプログラム、ショートフィルムの特集上映など、新たな映画の見せ方の提供が試みられた。ジュニア映画制作ワークショップでは作品内容がヒーロー物だったことで、参加生徒による寸劇の上演が行われたほか、2014年度ワークショップ完成作品「未



来選択」が「キネコ国際映画祭・ティーンズ・フィルム・コンペティション」でグランプリを受賞したことを受けての凱旋上映などジュニア映画制作ワークショップの活動も目立つものとなった。

#### ■ 4月～8月 プログラム選定

ボランティアスタッフにより構成されたプログラム委員会が映画祭上映作品を合議により選定。4月～8月まで定期的に会議を実施し確定させた。WEBを利用しての意見交換も活発に行われた。

#### ■ 8月～10月 広報宣伝物、WEB ページ等の作成

プログラム決定を受け、チラシ・フリーペーパーの制作やホームページの更新等が行われた。フリーペーパーではジュニア映画制作ワークショップ特集が生まれ、ワークショップ卒業生の俳優・柄本時生さんへのインタビューなど内容の充実が図られた。

#### ■ 9月～11月 広報活動

映画祭がスタートした 1995 年から実施している駅前でのポスター展を今年も実施した。また、イオン新百合ヶ丘の協力により、小田急線車内から見やすい位置に垂幕を掲示したり、川崎市の協力による川崎駅アゼリアビジョンでの予告編の放映、昨年麻生区の協力による駅前のバスターミナルの柱巻広告も実施された。小田急電鉄の協力による駅構内への映画祭ポスターの掲示、小田急バスの協力によるバス内の吊り下げチラシの設置など実績のある広報を中心に展開され、川崎色輪っかつなぎへの参加や麻生区役所でもポスター展を行うなど広報の幅を広げる取り組みも並行して行われた。



■ 駅前ポスター展



■ 色輪っかつなぎ作業風景



■ 観光協会提供のロケ地マップ

□ 10月10日～11月8日 宣伝ボードの設置 (会場：川崎市アートセンター)

会場となる川崎市アートセンターにおいて個別作品の宣伝ボードを設置し、作品の告知とチケット販売の促進を図った。作成は各作品担当の市民プロデューサーを中心に行われた。



■ 宣伝ボード制作風景



■ 宣伝ボード2F通路



■ 宣伝ボード3Fコラボスペース

□ 10月16日～11月7日 ポスター展 (会場：イオンシネマ新百合ヶ丘)

イオンシネマ新百合ヶ丘の協力により、映画祭上映作品のポスター展を開催した。2015年度はイオンシネマでの貸館上映を行わなかったが、館長の理解により実施することができた。



■ ポスター設置作業



■ ポスター掲示の様子

□ 10月23日～11月7日 ポスター展 (会場：麻生図書館)

麻生図書館の協力により、映画祭の開催期間に合わせて、イオンシネマ新百合ヶ丘、アルテリオ映像館、KAWASAKI しんゆり映画祭で上映される作品の合同ポスター展を行った。しんゆり映画祭の上映作品に関連した蔵書を集めた企画棚の設置も行われた。



□ 10月11日 あさお区民祭りでのPR活動（会場：麻生区役所前広場）

あさお区民祭りにてブースを借り、チラシの配布などを行った。今年はチラシ配りだけでなく映画関連の古本を販売する「シネマ古本市」を実施。チケット発売開始とタイミングが重なった為、アートセンターのチケット販売ブースへの誘導など行うことができ、有効なPR活動を行うことができた。



■ チラシ配布風景  
ス



■ シネマ古本市の様子



■ アートセンター販売ブース

□ 10月17日 禅寺丸柿まつりでのPR活動（会場：柿生駅前周辺）

柿生発祥の禅寺丸柿に因んで行われているお祭りへ市民スタッフが出向いて、チラシ配布を行った。  
新百合ヶ丘以外での貴重なPRの機会となった。



□ 10月24日 しんゆりマルシェでのPR活動

NPO 法人しんゆり・芸術のまちづくりの協力のもと、新百合ヶ丘駅周辺で行われるイベントにおいて、PR活動及び、プレイベントを行った。スペシャルステージ上で昭和音楽大学生の学生バンド「佐々木瑠風」とサクソ四重奏と打楽器の「リズムカル」によるライブが行われた他、マプレ特設ステージではNHK

連続ドラマの主題歌を歌った「月の 203 号室」による路上ライブも行われた。各ライブの前後においてスタッフによる PR も行われた。ジュニアワークショップの参加生徒も PR 活動に参加し、映画祭上映作品や実施イベントに関連したコスチュームでチラシ配りなどを行い、内容の濃い PR 活動となった。



■「佐々木瑠風」演奏風景  
景



■「リズムカル」演奏風景



■「月の 203 号室」演奏風景



■イベント前の PR の様子



■チラシ配布コスチューム



■会場内での PR の様子

## ■ 映画祭 11 月 3 日～11 月 8 日 （会場：川崎市アートセンター）

川崎市アートセンターの映像館、小劇場を利用し国内外の秀作を上映。今年には日本映画の新鋭監督や俳優が出演する作品に秀作が多くあり、日本映画最前線と銘打った特集が組まれた。土日・祝日を中心に上映作品にちなんだゲストを招き、それぞれ担当の市民プロデューサーが企画したトークイベントなどを実施した。チケット販売や観客誘導などの会場運営についても、川崎市アートセンターの協力のもと、市民ボランティアを中心に行われた。

11 月 3 日のオープニング作品であるジュニア映画制作ワークショップ作品「ムッツマン」発表会での千葉代表の挨拶からスタートし、全日程 6 日間全 22 作品を上映した。11 月 8 日のクロージング作品「KANO～1931 海の向こうの甲子園～」では、永瀬正敏さん、佐藤忠男さんを筆頭にゲスト 5 名をお呼びして、多彩なラインナップであった今年度の映画祭のフィナーレを豪華に迎えることができた。





■会場入口



■会場前風景



■物販ブース設置風景



■千葉代表による開催挨拶



■市山プロデューサーのトーク



■沖田監督と黒田さんトーク



■柳下毅一郎さんトーク



■川畑嘉文さん講演の様子



■『お盆の弟』トーク



■『ローリング』トーク



■「ショートフィルムのセカイ」トーク



■『虎影』トーク



■会場内顔出しパネル設置



## 【特別企画】

### □ 11月3日ジュニア映画制作ワークショップ発表会(会場:アルテリオ小劇場)

今年度のオープニング上映として「ジュニア映画制作ワークショップ」の完成作品発表会を実施し、制作に関わった中学生や家族のほか、一般の観客も観覧に訪れた。完成作品『ムッツマン』(25分)の上映後、日本映画大学学長で映画評論家の佐藤忠男さんからの講評、参加した中学生の舞台挨拶、指導講師や技術スタッフ、参加ボランティアスタッフによる講評を行い、今年のワークショップの様子を振り返った。

今年は、映画の制作に加え、発表会の内容決めや進行も中学生のアイデアをもとに行われ、作品内容がヒーロー物だったことで舞台挨拶前の寸劇や配布用キャラクターシールの作成が行われ、参加生徒の自主的なアイデアが多く出た年となった。また、終演後は参加者全員ロビーに出て、来場された観客一人一人に感謝を込めて見送りを行った。(来場者数 184名)



■参加生徒の舞台挨拶風景



■舞台挨拶前の寸劇



■川久保講師による講評



■佐藤忠男さんの講評



■ロビー前の活動記録掲示



■使用小道具の展示



■上映後のロビー風景



■上映後の見送り風景



■「電池切れ」と映画祭スタッフ



□ 11月8日 【凱旋上映！】 未来選択 （会場：アルテリオ小劇場）

2014年度ジュニア映画制作ワークショップ完成作品「未来選択」が「キネコ国際映画祭・ティーンズ・フィルム・コンペティション」でグランプリを受賞したことを受けての凱旋上映が実施された。ワークショップを支える映画祭スタッフによる活動に対する思いなどが語られる機会もあった。



■2014年度ワークショップ参加生徒による舞台挨拶



■映画祭スタッフの挨拶

□ 11月3日 活弁で甦る名画 弁士・澤登翠 『サンライズ』

今年は第1回アカデミー賞芸術作品賞などを受賞した無声映画の傑作『サンライズ』を上映した。毎年恒例の澤登さんの名調子により観客を大いに楽しませてくれた。上映後は、映画祭顧問の白鳥あかねと澤登さんによるトークショーも行い、作品の時代背景などについても理解を深める機会となった。



■澤登さんと白鳥顧問のトーク

□ 11月3日 《追悼 武重邦夫》『物置のピアノ』（会場：アルテリオ映像館）

しんゆり映画祭を草創期から支えてきた武重邦夫顧問が急逝されたこと偲んで、企画・製作を手掛けた作品『物置のピアノ』の追悼上映を行った。日本映画学校出身の監督、プロデューサー、原作者を招き、映画祭スタッフが聞き役となり、作品の魅力を語りつつ、その豪快な人となりを語ってもらった。

□ 11月7日 かわさきシネマアワード ノミネート作品上映  
『喜劇 駅前団地』

川崎市市民ミュージアム、川崎市アートセンター、しんゆり映画祭の3カ所をノミネート作品上映会場として「かわさきシネマアワード」が実施された。しんゆり映画祭においては百合ヶ丘団地をロケ地とした映画『喜劇 駅前団地』が上映された。川崎市提供による当時の市政ニュース映像も同時上映され、多くの観客に当時を振り返ってもらう希少な機会を提供できた。

□ 11月8日 《ふるさと創造・映像教育プロジェクト》  
『いいな広野 わが町再発見』（会場：アルテリオ小劇場）

福島県出身である KAWASAKI しんゆり映画祭の千葉代表が実施したプロジェクトの完成作品の上映を実施した。プロジェクトの目的としては被災地の生徒が地元を紹介する映像を撮ることを通して、被災地の地域コミュニティの再生が図られている。ビデオ取材も入り、関心の高さがうかがわれた。



■佐藤忠男先生、千葉茂樹先生、中山周治先生による活動紹介とトーク

□ 11月3日（火）～11月7日（土） バリアフリーシアターの実施

●保育付上映

11月5日（木）上映の『365日のシンプルライフ』『アリスのままで』に関して、6ヵ月～4歳までのこどもを預かる託児サービスを実施。保育グループ「ジャンケンポン」と提携して事業を実施し、保育者を4名派遣してもらい、映画祭スタッフとともに保護者の映画鑑賞時間中、こどもをお預かりした。





### ●副音声ガイド付上映

11月4日（水）、11月7日（土）の『お盆の弟』上映に関して、視覚障がい者向けの副音声ガイドを映画祭独自に制作し・提供を行った。11月6日（金）の『物置のピアノ』に関しては配給元よりバリアフリー素材での提供を受けての、実施となった。（サービス利用者数・19名）



### ●日本語字幕付上映

11月3日（火・祝）、11月6日（金）に上映した『物置のピアノ』に関して配給元より日本語字幕付き素材の提供を受け実施した。広報に当たっては、川崎市聴覚障がい者情報文化センターの協力を得て、NPO 法人川崎市ろう者協会及び川崎市中途失聴・難聴者協会の広報誌への掲載した結果、利用者の来場があった。



□ 11月3日（火）～11月8日（日） シネマウマカフェの実施

映画祭期間中に上映会場であるアートセンター3F コラボレーションスペースにおいて近隣の飲食店と提携して「シネマウマカフェ」を開設した。日替わりでお弁当やコーヒーなどの提供を行った。

参加店舗

「NARUTO Coffee&Roasters」「エチエンヌ」「カンガルー」「Café Sante」「大平屋」  
「ムビリング」



■ シネマウマカフェ看板  
のコラボ弁当



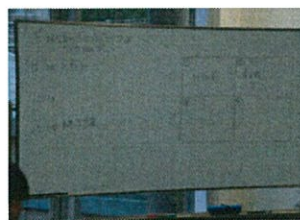
■ ドリップコーヒーの提供



■ ムビリングと

□ 11月8日 鑑賞+対話ワークショップ in KAWASAKI しんゆり映画祭

新しい映画の見せ方として映画（kino）をきっかけに、対話（dialogue）をするワークショップを企画・運営する「kinolouge」から代表の森下詩子さんを招いて、『365日のシンプルライフ』の鑑賞をセットにしたワークショップを実施した。映画のテーマであった「あなたにとって大切なモノとは？」に沿って、作品鑑賞をきっかけに自分自身を深く再確認できる機会を提供することができた。





□ 11月8日 クロージング作品『KANO』上映イベント  
(会場：アルテリオ小劇場)

2015年度 KAWASAKI しんゆり映画祭の最終上映となる『KANO～1931 海の向こうの甲子園～』の上映に伴い、イベントを実施。ゲストに出演者である永瀬正敏さん、山室光太朗さん、大倉祐真さん、飯田のえるさん、映画評論家の佐藤忠男さんを招いてのトークイベントが実施された。

映画配給会社のご厚意により来場者への全員プレゼントとして野球カードやコインの配布が行われた他、直筆サイン入りボールの抽選会、甲子園のウグイス嬢に依頼した録音を使用したの選手紹介風ゲスト呼び込み、映画のモデルとなった選手の親族の招待と盛りだくさんの内容となった。



■ 上映前会場の様子



■ 作品紹介の資料設置風景



■ トークイベント前の会場



■ 佐藤忠男さん



■ ゲストと映画祭スタッフ



第 21 回 KAWASAKI しんゆり映画祭 2015 上映作品

《しんゆりセレクト！日本映画最前線》

『グッド・ストライプス』『トイレのピエタ』『虎影』『ローリング』『滝を見に行く』『お盆の弟』

《話題の洋画傑作選》

『アリスのまま』『6才のボクが、大人になるまで。』『KANO ～1931 海の向こうの甲子園～』

『神々のたそがれ』『それでも僕は帰る ～シリア若者たちが求め続けたふるさと～』

《スクリーンで観るショートフィルムのセカイ》

『半分ノ世界』『エンドローラーズ』『豆大福ものがたり』

《鑑賞＋対話ワークショップ》

『365日のシンプルライフ』

《かわさきシネマアワード》

『喜劇 駅前団地』

《活弁で甦る名画 弁士 澤登翠》

『サンライズ』

《東京フィルメックス in しんゆり》

『私の少女』

《追悼 武重邦夫》

『物置のピアノ』

《ジュニア映画制作ワークショップ発表会》

『ムッツマン』

《凱旋上映！》

『未来選択』（2014年度ジュニア映画制作ワークショップ完成作品）

《ふるさと創造・映像教育プロジェクト》

『いいな広野 わが町再発見』

合計 22 作品（※中・短編含む）



## 登壇者（敬称略、順不同）

市山尚三（映画祭ディレクター）、似内千晶（監督）、橘内裕人（プロデューサー）、原みさほ（原作者）、  
岨手由貴子（監督）、菊池亜希子（女優）、大崎章（監督）、足立紳（脚本家）、  
柳下毅一郎（映画評論家）、松永大司（監督）、杉咲花（女優）、森下詩子（キノログ代表）、  
富永昌敬（監督）、高川裕也（俳優）、澤登翠（活動弁士）、白鳥あかね（スクリプター）、  
川畑嘉文（フォトジャーナリスト）、黒田大輔（俳優）、沖田修一（監督）、吉野耕平（監督）、  
屋敷紘子（女優）、津田寛治（俳優）、西村喜廣（監督）、中山周治（日本映画大学講師）、  
佐藤忠男（映画評論家）、永瀬正敏（俳優）、山室光太郎（俳優）、大倉祐真（俳優）、飯田のえる（俳優）  
千葉茂樹（映画祭代表）

合計 30 名

## 動員数データ

チケット売上枚数 2144 枚

観客動員数 2445 名

有料プログラム数 17 プログラム（19 作品）

上映プログラム数 20 プログラム（22 作品）

合計上映回数 36 回

1 日あたりの平均集客数 全日 408 名 / 休日 571 名 / 平日 284 名

1 作品あたりの平均集客数 111 名

## 今年度の総括と来年度への取組み

2015年度は上映作品 22 作品中、有料上映 17 プログラム (19 作品)、無料上映 3 プログラムとなった。昨年まで行っていたイオンシネマ新百合丘での上映を取りやめ、川崎市アートセンター映像館・小劇場の 2 会場での開催となった。上映枠確保の為、平日のアルテリオ小劇場を稼働させたことにより上映枠の確保が行われ、昨年以上の動員数をあげる結果となった。

昨年は 20 回記念イベントを実施していたことで上映枠が減っていたことも要因として挙げられるが、有料上映作品が昨年 20 プログラムから今年 17 プログラムだったことを考えると動員的に 5% 増加したことは評価できると思われる。

単体上映回では 11/7 の「虎影」が 1 番の入場者数を記録した。要因として主演の斎藤工さんの人気によるものと考えられ、普段のしんゆり映画祭の観客以外を呼び込むことに成功したことが大きかったと思われる。作品別での動員数トップは「KANO」となり、ゲスト来場回では「虎影」に及ばなかったものの通常上映時の観客数に恵まれトップとなった。通常上映回が平日昼だったことから地元の固定客が足を運んだものと考えられる。

また、今年も昨年同様バリアフリーシアターにおいて、保育サービスが受付数を超える申し込みがあり、子育て世代の多い新百合ヶ丘という土地柄が出ていた。『お盆の弟：副音声ガイド付上映』も昨年並みの申込みと利用があり、「KAWASAKI しんゆり映画祭」におけるバリアフリー上映がしっかり根付いていることが分かる。さらに今年は配給元でバリアフリー素材が作成されている『物置のピアノ』の上映を行ったことで、同作の副音声付上映の他、日本語字幕付上映を行うことができ、より充実したサービスを行うことができた。

広報については、例年行っている川崎市と麻生区を通しての媒体の他、昨年実績のある麻生区協力による柱巻き広告や小田急電鉄の協力による駅構内のポスター設置、小田急バスの協力によるバス内吊り下げチラシの設置も継続して行われた。実際に設置されているかの確認がとれない媒体もあり、改善の余地が見られた。ボランティアスタッフによる地域イベントに直接出向いてのチラシ配りは、昨年以上に積極的に実施された。映画祭の PR になることはもちろんだが、ボランティアスタッフ間の交流にもつながった。



今年の来場者アンケートは719名の回答があった。上映作品の感想やスタッフの対応については、「非常によかった」「よかった」が約9割を占めている。複数回答可の来場理由は例年通り「上映プログラムが気になったから」が1位を占めることとなったが、「映画祭に興味があった」が初めて2割を越えることができ、映画祭への認知度や評価が高まっている状況が読み取れた。リピーター率は約6割で、来場者がしっかりと定着していることが分かった。リピーター観客の内容としては「1~2回」が増えていることは良い要因だが、6回以上のコアファンが若干減少している点は気に留めておきたい。観客の傾向としては、女性の割合が増えており、ゲストの永瀬正敏さんなどの女性ファンの動員が見込まれる作品が小劇場（195席）でかかったことに由来するものと考えられる。菊池亜希子さんや杉咲花さんなど人気女優がゲストとして来場することが決まっていた作品が、上映素材の関係で収容人数の少ない映像館（113名）での上映となったことも加えて影響を及ぼしているように思われる。観客の年齢層としては昨年同様に40~60歳代で約6割を占めているが、20代の客層が昨年よりも30%上昇しており、若年層に人気のあるゲストを呼べたことが数字に表れたように思われる。

広報面では、映画祭を知ったきっかけとして、「映画祭のダイレクトメールやチラシで知った人」が5割を占める例年通りの結果となった。ただダイレクトメールの送料金の削減の為、発送手段の取捨選択は行っていきたい。昨年から力を入れている「公式ホームページやツイッター」は18%の人が知ったきっかけになったとしており、やはり幅広くPRできる有効な手段であることがわかった。「市広報誌等で知った人」も11%あり、高い年齢層の来場者が多い当映画祭において有効な手段のひとつであることが分かる。「テレビ・ラジオ」は昨年の結果から積極的な活用はおこなわなかったが、来場者数の減少が見られず、まずはこの路線での立場を維持していきたい。

今年は昨年の結果を受けて、ゲスト数の大幅増加や上映イベントの充実などが行われたが、それに伴いボランティアの作業負担の増加や偏りが生じてしまった。改善策として組織体系の見直しや作業分担に関しての新しい方法を模索していき、持続性のある組織を目指していきたい。

以上

## [企画・制作事業]

### 1. バリアフリーシアター制作事業

1997年より活動している「バリアフリーシアター制作」は18年目を迎えた。

#### (1) アートセンター委託制作およびバリアフリー上映の充実

日本映画2本、外国映画2本に対して音声ガイドを制作した。本編を損ねず正しい情報が伝わ

るように、映画製作者や配給会社にも確認を依頼し、丁寧なガイド作りを信条としている。

特に音声ガイド付と日本語吹替付きで映画を原音を聞きながら外国映画を劇場で提供する数

少ない劇場であり、今年度の外国映画2作品は、利用者が最も多く内容も非常に喜ばれた。

#### (2) 視覚障がい者向けの上映【しんゆり映画祭での上映】

平成27年度、映画祭では、しんゆり映画祭の創始者である武重邦夫が企画・制作した『物置のピアノ』をバリアフリー上映作品として選び、音声ガイド台本を制作、ガイド朗読を収録した。監督・原作等日本映画学校出身者が関わり、本編には昭和音楽大学新百合ヶ丘校舎も出てくる新百合ヶ丘とも縁の深い作品。震災後の福島を舞台にした作品となっている。

また、第16回日本映画批評家大賞新人監督賞を受賞した大崎章監督の新作『お盆の弟』も、音声ガイド台本を制作、ガイド朗読を収録して、バリアフリー上映を行った。脚本は第一回松田優作賞を『百円の恋』で受賞した足立紳。

『物置のピアノ』は監督・原作者・プロデューサーを、『お盆の弟』は監督と脚本家を迎えてのゲスト付き通常上映、バリアフリー上映を実施し、多くのイヤホンガイド利用者があった。



## 【本年度の制作した作品】

### ■川崎市アートセンターからの委託制作およびバリアフリー上映協力

『マダム・イン・ニューヨーク』 音声ガイド台本制作/日本語吹替 制作(収録)

『物置のピアノ』 音声ガイド台本制作(収録)

『グッド・ライ〜いちばん優しい嘘〜』音声ガイド台本制作/日本語吹替 制作(収録)

『ゆずり葉の頃』音声ガイド台本制作(収録)

『ヴィンセントが教えてくれたこと』音声ガイド台本制作/日本語吹替 制作(収録)

### ■第21回 KAWASAKI しんゆり映画祭・制作・上映

『お盆の弟』 音声ガイド台本制作(収録)

### ■「物置のピアノ」製作委員会からの委託制作(26年度～27年度)

『物置のピアノ』バリアフリー日本語字幕制作

## 2.劇団わが町

アートセンター創設時より、ふじたあさや中心に企画していた市民のための市民によるしんゆりの市民劇団。

2012年6月に生まれた新しいゆるやかな劇団。劇団員は地域住民の方々、総勢約50数名。

年齢制限はなく、現在8～78歳までのメンバーが所属。しんゆりシアターのラインナップの一翼を担い、長期的に様々な創造活動を行なっている。

### ■しんゆりシアター 劇団わが町 第5回公演「わが町溝の口」

開催期間：2016年3月10日(木)～13日(日)

会場：川崎市アートセンター アルテリオ小劇場

2014年に劇団第二回目のオーディションを実施し、層の厚くなった団員を「さくら」と「ゆり」2組に分けてWキャストでの公演を実施。

演目は、「わが町溝の口」。

劇団わが町では、2013年3月にソーントン・ワイルダー原作の「わが町」を新百合ヶ丘とアメリカを行き交う舞台に置き換えた「わが町しんゆり」を試演、本公演、麻生区と多摩区の市民館ホールでの再演と、劇団旗揚げ当初から繰り返し公演してきたが、今回の演目は、「わが町」を日本の地元を舞台に作り替えるという発想でつくられ、川崎市文化賞を得た長岡輝子の翻案第一号。

40年の時を超えて、劇団わが町で2016年の新百合ヶ丘住民に通ずるものに作り上げた。

劇団わがまちの1作目「わが町しんゆり」を見て、入団した第二期劇団員もいたため、全体に大変やる気が漲り、団員が自発的に動き、提案し、支え合う場が随所で見受けられた。

回は、出演者が全員着物での出演となり、着付けを身につけるところから始め、劇中には祭りのお囃子シーンで、獅子舞やおかめとひょっとこの舞も登場し、日本の伝統芸を盛り込む、劇団としても新しい挑戦があった。

更に、舞台美術は、背面に可動式の大黒板を3枚並べ、そこにリアルタイムで団員がチョークで、背景やシーンに則した絵や文字、地図を書き込むという、こちらも新たな試みをした。

部隊裏では、迅速な回転とチームワークが必須となり、試行錯誤を最後まで繰り返していたが、結果チームでの協力が強まり、黒板美術は来場者にも非常に好評を受けた点のひとつとなった。

芸術文化を受け取る側と発信する側のクロスオーバー、と地域の文化を育てていく、劇団の当初の狙いから、早くも市民が自立し出し、自覚を持って自らが文化をつくり出し、波を広げていこうとする気概が、本公演から強く感じられた。

演出助手をする団員も発生し、また各作業担当や、劇団内での問題を自分たちで解決している様子から、劇団という場自体の成長を通して、街を育てることが市民の中で地続きであることが、見てとれ、この地域にとっても明るい兆しが、この場で根を張り出していると言える。

前公演に引き続き、当法人は本公演の企画・制作を担った。



## [主催事業]

### 1. company ma 劇団「間」旗揚げ公演

#### 『雨ニモ負ケズ』

開催期間：2015年9月21日(月・祝)～9月23日(水・祝)

会場：川崎市アートセンター アルテリオ小劇場

出演：古舘一也、大谷恵理子、原田亮、土井真波（劇団銅鑼）、森山蓉子（劇団わが町）

構成・演出：大谷賢治郎

劇団わが町公演で、ワークショップ講師・演出補を担当し、アーツ理事でもある大谷賢治郎主宰の劇団「間」company ma。

その旗揚げ公演は、ノンバーバルという、言葉に頼らない舞台として作成された『雨ニモ負ケズ』。

演者の表情、身体、舞台の次空間で物語を紡いでいく。

台詞こそないものの、内容は子どもから大人までが、前知識なしに五感で楽しめる内容のもの。

本公演は、チャップリンと宮沢賢治の世界観からインスパイアされたものを、2016年の日本の今をあぶり出しつつ、希望が垣間見えるような、随所にシニカルさとコメディ要素を折り混ぜた作品に仕上がった。

company ma は、「子どもが笑えば、世界は笑う」を合言葉に、新百合ヶ丘を拠点に活動を始動させた。

出演者には、劇団わが町のメンバーや毎回客演として出演している役者・ダンサーが参加。

KAWASAKI アーツでは、公演を主催、制作業務も担当した。

## [委託事業]

### 1.あさお区福祉啓発映画会

川崎市麻生区社会福祉協議会主催の「福祉啓発映画会(平成 28 年 3 月 23 日(水)新百合 21 ホールにて開催)」における長編動画『毎日がアルツハイマー』の上映と監督トークショーのコーディネート、当日映写、ゲスト対応を担った。

当日は400名のホールが満席となる大盛況、監督のトークもアンケートの結果が、回収率が7割、内容に満足が9割と大変好評を得た。特に監督トークに満足された方が多かった。

本作は、しんゆり映画祭で過去に上映、監督トークも実施実績があり、今回その経験と繋がりがフルに活用できた機会となった。

また、今回は予算の都合により、業者に映写を委託せず、アーツ事務局で実施した。

## [協賛事業]

「平成 27 年度あさお芸術のまちコンサート」に、名義等で協賛を実施した。

## II 運営組織の状況に関する事項

### 1. 事務局運営

平成 27 年度は、映画祭事業、その他の文化事業は、バリアフリー副音声日本語吹替え制作、劇団わが町企画・制作といった例年の事業に加え、劇団の旗揚げ公演を主催するという新たな挑戦をした年であった。

反面、例年委託を受けていた「福祉まつり」の委託を今年度受けなかったため、法人としての収入は若干落ちた。

事務局体制としては、基本法人事務局員一人での業務稼働のため、映画祭事務局、ボランティアスタッフのサポートがあって実施できた内容であった。

しかし、主軸となる事業である映画祭の予算が年々減っていることから明白なように、収入を増やすことが、当法人運営にとっては今後一層大きな課題となる。

引き続き、事務局体制を整える課題は残るが、主軸となる事業自体がいま、岐路にたっている局面でもあることから、まずは法人の方向性を含む長期運営を今一度明確にする必要がある。

## 2. 役員に関する事項

### (1) 役員の氏名及び職制上の地位

地 位	氏 名	専 門
理 事 長	藤田 朝也	演劇・ミュージカル
副理事長	河野 和子	教育
専務理事	白鳥 あかね	映画・映画祭
理 事	黒田 隆	音楽
理 事	千葉 茂樹	映画・映画祭
理 事	森 正敏	演劇
理 事	安岡 卓治	映画・映画祭
理 事	瀧澤 春江	映画祭・バリアフリーシアター制作
理 事	岩倉 宏司	宣伝・広報
理 事	阿佐美 善久	宣伝・広報
理 事	大谷 賢治郎	演劇
監 事	田島 俊明	行政
顧 問	佐藤 忠男	日本映画大学学長
顧 問	中島 豪一	川崎新都心街づくり財団評議員
シニア・アドバイザー	下八川 共祐	昭和音楽大学理事長
	岩崎 敬	環境デザイナー



## 活動計算書

27年4月1日から28年3月31日まで

特定非営利活動法人 KAWASAKIアーツ

(単位:円)

科目	金額	
<b>I 経常収益</b>		
1. 受取会費		
会員受取会費	222,890	222,890
2. 受取寄附金・協賛金		
受取寄附金		
受取協賛金		0
3. 受取助成金・委託金等		
川崎市負担金	7,250,000	
日本芸術文化振興助成金	1,200,000	
麻生区地域振興課 区委託金	924,200	
その他助成金・委託金	3,054,653	12,428,853
4. 事業収益		
①芸術文化をとおしたまちづくり事業(映画祭事業)		3,147,345
チケット販売収入	2,222,200	
広告収入	600,000	
物販収入	154,145	
ジュニア参加費	171,000	
②文化芸術振興に関する収入		0
バリアフリー委託費(文化財団)		
映画製作費収入		
その他業務委託収入		
5. その他収益		
受取利息	940	
雑収益	124,204	
借入金債務免除益		125,144
経常収益計		15,924,232
<b>II 経常費用</b>		
1. 事業費		
(1) 人件費		
給料手当	3,966,894	
法定福利費	19,731	
福利厚生費	444,525	
謝礼	2,374,906	
人件費計	6,806,056	
(2) その他経費		
フィルム仕入	1,534,359	
その他仕入	134,243	
広告宣伝費	1,845,614	
リース料	131,347	
地代家賃	1,790,633	
事務用消耗品費	41,201	
通信交通費	917,019	
租税公課	1,000	
交際費	53,202	
保険料	100,080	
備品消耗品費	281,354	
外注費	819,919	
制作費	232,943	
その他経費等	422,202	
その他経費計	8,305,116	
事業費計		15,111,172

2. 管理費			
(1) 人件費			
役員報酬	0		
給料手当	0		
法定福利費	0		
退職給付費用	0		
福利厚生費	0		
謝礼	0		
人件費計	0		
(2) その他経費			
フィルム仕入	0		
広告宣伝費	0		
旅費交通費	0		
地代家賃	0		
その他経費等	0		
その他経費計	0		
管理費計		0	
経常費用計			15,111,172
当期経常増減額			813,060
III 経常外収益			
1. 固定資産売却益		0	
経常外収益計			0
IV 経常外費用			
1. 過年度損益修正損		0	
経常外費用計		0	0
税引前当期正味財産増減額			813,060
法人税、住民税及び事業税			167,564
当期正味財産増減額			645,496
前期繰越正味財産額			1,881,387
次期繰越正味財産額			2,526,883

# 貸借対照表

平成28年 3月31日 現在

特定非営利活動法人 KAWASAKIアーツ

(単位： 円)

## 資産の部

### 【流動資産】

現金及び預金	1,889,249	
未収入金	1,820,000	
流動資産合計		3,709,249
資産の部合計		3,709,249

## 負債の部

### 【流動負債】

短期借入金	349,485	
未払金	199,120	
未払費用	414,186	
未払法人税等	167,400	
預り金	52,175	
流動負債合計		1,182,366
負債の部合計		1,182,366

## 純資産の部

### 【株主資本】

利益剰余金		
その他利益剰余金		
非営利事業に係る繰越利益	4,214,161	
繰越利益剰余金	-1,687,278	
その他利益剰余金合計	2,526,883	
利益剰余金合計	2,526,883	
株主資本合計		2,526,883
純資産の部合計		2,526,883
負債及び純資産合計		3,709,249



**財産目録**  
28年3月31日現在

特定非営利活動法人 KAWASAKIアーツ  
(単位:円)

科目	金額	金額	金額
<b>I 資産の部</b>			
1. 流動資産			
現金	350,037		
預金	1,539,212		
未収入金	1,820,000		
流動資産合計		3,709,249	
2. 固定資産			
(1) 有形固定資産			
車両運搬具	0		
什器備品	0		
その他有形固定資産	0		
有形固定資産計	0		
(2) 無形固定資産			
ソフトウェア	0		
	0		
無形固定資産計	0		
(3) 投資その他の資産			
敷金	0		
	0		
投資その他の資産計	0		
固定資産合計		0	
資産合計			3,709,249
<b>II 負債の部</b>			
1. 流動負債			
未払金	199,120		
短期借入金	349,485		
未払費用	414,186		
未払法人税等	167,400		
預り金	52,175		
流動負債合計		1,182,366	
2. 固定負債			
長期借入金	0		
退職給付引当金	0		
固定負債合計		0	
負債合計			1,182,366
正味財産			2,526,883